

石になった赤ちゃん

家床 永友 千秋 七十八歳

トンゴシのお崎の鼻に、こんな話もある。

道が東光寺の方に曲がった所の上に大きな松の木があって、その下の円い石を誰かが祀っている。

ある夕暮れ、どこかのおばあさんが町で買物をしての帰りに、赤ん坊をだいた母親に出あった。「すみませんが忘れ物をしたので急いで取りに帰って来ます。しばらく赤ん坊をだっこしていてくださいませんか」とのこと。かわいい赤ちゃんのことだし、だっこしてあげました。すぐ来ますからといったのに、暗くなっても帰ってこず、赤ん坊はおながすいたらしく、オギャーオギャーと泣き出して、いくらあやしても泣きやみません。

夜中になっても捨てて帰るのはかわいそうだし、土手に腰かけているうちに眠ってしまいました。

夜が明けてみると大きな石をだっこしていて、町から買って来ていた御馳走はふろしきだけになっていました。気の毒なおばあさん。今ある円い石はその時の赤ん坊で

しょうか。



狐のくれた金首巻

山王（羽根田）の西のはずれに狐塚という塚があります。昔はこの付近は山で大きな松の木や雑木がうっそうとおい茂り、昼間でもさみしい所でした。又、夕暮れ近くになるとコーン、コーンと狐の鳴き声が聞こえ、家のすぐ近くまで出てきては、いたずらしていたそうです。私がまだ小さい頃、いろり端で祖父がよく次のような話をして聞かせてくれました。これはその中の一つです。

ある秋の日のことです。羽根田に住む爺ちゃんが、青木の村祭りに呼ばれど馳走になり、帰り際にその家の嫁ごがご馳走を一杯詰めた重箱を持たせてくれて、落とすといけないからと、親切にも手首にしっかりと結びつけてくれました。

爺さんは飲んだ酒の酔いがまわり、ふらふらしながらたどたどしく歩いていきます。秋の日のことですからもうあたりはだんだんとうす暗くなってきました。と、狐塚のところまで来た時です。向こうの方でどうやら若い



娘らしいものが、三人寄って何やらヒソヒソとしゃべっている様子です。爺さんがよく見ますとどうしたというのでしよう。見たこともないような、すぐきれいな振り袖を着た娘達です。しかも三人とも瓜ざね顔の凄いい人です。はて？ 何をしているのかなと思ひながら、近

付いていって言いました。

「これ、おごじよ達。なにゆしちよつとかの、はよかえらんと狐に化かさるっど」

と言いますと、娘たち三人はニコニコしながら答えました。

「じいちゃんは、青木の村祭りに呼ばれちいったっじゃろ、みやげのごっそももちよりやるごたるが、いいにおいがぶんぶんするよ」

ということです。爺さんは

「よう知っちよるのー」

と、びっくりしました。ところが一人の娘が前に進み出ていうのです。

「私たちやね、となり村のもんじゃけど、高鍋にいつて今帰る途中じゃけん、ここまで来たら三人とも腹が減ってもう歩く元氣もねつよね、それでどうしようかと相談しよったとこよ、それでどんげじゃるか、爺ちゃんのご馳走をくりやんかしらん。そんなわりうちどんが持つちよる金の首巻をあげるが」

ということです。爺さんは、すぐさま手を振りながらい

いました。

「いやいや、俺はそんなものはいらん。それにこりや神さんのごっそじゃかり、持って帰らにゃならんのじゃ」

と言いますと、娘たちは悲しそうな顔をして尚も頼むのです。

「じいちゃん、お願いしますよ。私達お腹がすいてもう歩けそうにもないのです。この首巻は金ですし、じいちゃんとの婆ちゃんや娘さんがとてもよろこびますよ」
ということです。爺さんはそれを聞くとかわいそうになり、首巻もなんだかピカリピカリと輝いているみたいでその気になりました。又、大分酒を飲んでいたと見えてよろよろしながら言いました。

「よしよし、お前達がそんげいうなら、ごっそとかえちゃろわい」

といって娘達の方を見ますと、手首にゆわえていた重箱はいつの間にか娘が持っていました。それに手首と腿（もも）のあたりが、なんだかひりひりと痛むのですが、なにしろ酔っていますので、すぐに忘れてしまいました。気がつくと娘達はもう向こうの方を歩いていきますし、自

分の首にまいた金の首巻がとても気に入りました。大
変いい気分になって、わが家をさして意気揚々と帰って
いったのです。やがて家にたどりついた爺さんは、戸口



の戸をがらりと開けるなり

「おーい、婆さん今帰ったぞ。今日はいいもん
をもちきたぞ。早よ来て見よ」

といいますと、婆さんは奥の方にいましたが、
爺さんが余りうるさくいうのでいってみました。
爺さんは婆さんを見るなり、首巻を広げてみせ
ながらいきました。

「こん首巻きや山王ん狐塚んとこで、どっかん
娘がおち、ごっそとかえちくりというもんじゃ
かりかえちきたつよ。どんげかよ、金じゃかり
立派なもんじゃろが」

と、得意になって見せるのです。婆さんは、
どれどれといいながらそばに寄ってみますと、
金の首巻どころか、首に巻きつけているのは爺
さんがいつも腰につけている「へこ」ではあり
ませんか。婆さんはあきれていいました。

「爺さん、おまやなにをとぼけちよつとだよ。こりやお
まえん「へこ」じゃねの」

といいますが、何度いってきかせても聞き入れません。

婆さんは困り果てて奥にいる息子を呼んでわけを話しますと、息子も

「じさんじさん、おまやどしたつのよ。汚ねじゃねの、早よ首からはずさんの」

と何でも叱るように言いますが、爺さんはどうしても聞き入れず、金の首巻をだきしめたまま床にもぐって寝てしまいました。

次の日の朝です。目が覚めた爺さんは、手に自分の「へこ」をしっかりとにぎりしめているのに気がつきました。おかしいなと思ってよく考えてみると、夕べ祭から帰るとき、どこかの娘から金の首巻をもらったことを思い出しました。さては、狐からだまされたなと、くやしがりましたが、もう後の祭りです。それに手首と太もものところがひりひりと痛むのです。よく見ると何かの爪痕が一杯ついているのです。

娘に化けた狐どもが、爺さんのご馳走とふんどしを取る時にひっかいた爪痕だったのかも知れません。

トンゴシの話

家床 永友 千秋 七十八歳

高鍋昔話第一集に、「洗橋のチンジョキジョキ」の怪談が出ましたので、今度は持田の「お崎のはな」のトンゴシの定番です。

坂本村の東、「お崎のはな」という所は、昔から「トンゴシ」がよく出る所で、夜になると皆こわがって通らないくらいでした。

幅二米位のせまい路が、がけの下を曲りくねって通っていて、大昔の人の横穴古墳のお墓か、昔の人々の住居跡だろうといって、中に入って見るのもこわく、その上のがけには松の太木や雑木林がおおいかぶさっていて、路の片がわは竹やぶ、その向こうは小丸川ぞいの松山で、檜谷堤の水を坂本の田んぼにひく井手が流れていて、昼間でも薄気味悪く、近くには家はなく、こわれかかった茅ぶきの水車小屋が唯一軒、「ザブザブザブ、ギーッゴットン」とまわっていて、米や麦をはがしていたのだそうですが、時々白髪のおばあさんが、お米や小豆などを、

「ゴシゴシ　ゴシゴシ」といっていたそうで、悪口などゆ
うと、おっかけて来ていたのだそうです。

ある晩、村の青年が二人通りがかって、「今もトンゴシ
婆々がおりやるとかい」と冗談をいいながら、中をのぞ



いたところ、「今もおりますトンゴシトンゴシ」といって
見上げた白髪の婆さん、目は月の光をうけてきらきら光
り、口は耳の下までさけている山ン婆。びっくりぎよう
てんの青年、すっかり腰をぬかして、路をはうようにし

て逃げ帰ったが、「今もおります　トンゴシト
ンゴシ」と追っかけて来たそうです。

まだ小学生だった私は、課外で暗くなつて一
人ぼっちで帰る時は、カバンをおさえ、ぞうり
のかかとが「パタパタ」音がせぬよう、足音を
しのばせて水車のそばを通り、過ぎると後はい
ちもくさん、後も見ずに走ったものです。

大正年間で、ここを通るほかに道はなかった
のです。

かっぱの手

鴨野 森 仲吉 八十三歳

鴨野の地域に水神様が祀られています。社は小さいのですが水神様の神木で樹齡が千年近くにもなる松の木でした。大きな枝を四方にのばしてそれは見事な松でしたが、その松の木のすぐ下は、水面が青々として深さが十五、六米もある広々とした川になっていました。当時、鴨野には千石船が十隻もいたのですが、その船が結構入港するだけの広さでした。

昔は「かっぱ」がたくさん住んでいて、人がいなくなる夕方頃になると「かっぱ」がごろごろと水神様の社の前の庭に集まって、何やらしきりに評議をしていたと伝えられています。

ところがある日のこと、鴨野の黒木直吉さんが馬をひいて水神様の下の川へ馬洗いにいきました。(その頃は鴨野地域には馬が多く、一軒の家に馬が三匹から四匹も飼われていて、主に運搬用とされていました。) 直吉さんが馬を川にいれ冷たい水でゴシゴシと洗ってやると、馬

はいかにも気持ちよさそうに立っていました。が、やがて洗い終わるのを待っていたかのように、何を思ったのか突然に川の深いほうへザブザブと泳いでいったのです。

ところがややしばらくして、何か口にくわえてあがってきました。よく見ると馬が口にくわえているのは、「かっぱ」の手らしいのです。直吉さんはびっくり仰天しましたが、これは珍しいものが手に入ったと、家に持って帰り皆に見せました。ところが見た者は気味悪がって、罪(ば



ち)があたるといかんというので、相談の末「ウトノヤマ」へ丁寧に埋葬しました。

「かっぱ」の手を埋めた「ウトノヤマ」は樹齢六百年程の太い大木が密生していて、昼も暗い気味の悪い場所です。「ナベノフタ」が下がるというわれ、村人達が怖がっていた人通りの少ない場所でした。

ところがその晩のことです。「かっぱ」が直吉さんの家の庭にやって来て、

「昼間、川の淵から帰った私の手を返して下さい。あれがないと川の中で泳ぐことができません。どうか、お願いします」

と繰り返し頼みました。直吉さんはたかをくくって知らん顔をしていました。しかし翌日も、そのまた次の晩も、毎晩、毎晩「かっぱ」は直吉さんに頼みに来るのです。直吉さんは「かっぱ」のこととはいえかわいそうに思い、手を埋めた所と、埋めた様子を詳しく話してやりました。

「かっぱ」は大変喜んで何度も何度も御礼をいいながら山の方へ去っていきました。そして、その次の日からは

二度と現われることはなかったといっています。

そこで直吉さんは水神様にお参りして、今までの事を告げて意地悪したことも詫び、水神様のお祭りを盛大にしました。お陰でその後直吉さんは元気で豊かに暮らしたといっています。

丁度その時から直吉さんの家が代々、水神様の祭りの時にはしめ縄を立派に造り、奉納するようになりました。その習わしが現在も続いていて、直吉さんの家が毎年水神様のお祭りには立派なしめ縄を奉納されています。

水神様のお祭りは、村中全員が集まってお祭りをします。祭りの時には笠を作って奉納しますが、その笠を子供がかぶると病気にからず、立派に成長すると言うので子供は争ってその帽子をかぶります。

又、若者が昔から伝わっている棒踊りを奉納します。こうしたことで祭りには大勢の見物人がおしかけて大変な賑わいとなります。

昔から水神様は郷土の守り神として敬われ、病気の平癒や願い事をする場合は、水神様の庭に食物等を持ち寄って賑やかにお祭りをしたのです。

六ろちんと七ろちん

家床 永友 千秋 七十八歳

昔、坂本の村に政吉どんという、なかなかちえのあるおじいさんがおられたそう。坂本の上の西が原という、持田古墳がいくつもいくつもある、松山や竹やぶのしげった所がある。時々きつねやたぬきが出ては、通る人々にいたずらをするという話でした。

ある日、そこを

通りがかった

通り浜の

魚売りのおば

さんが、かわい

いお嫁さんと出会

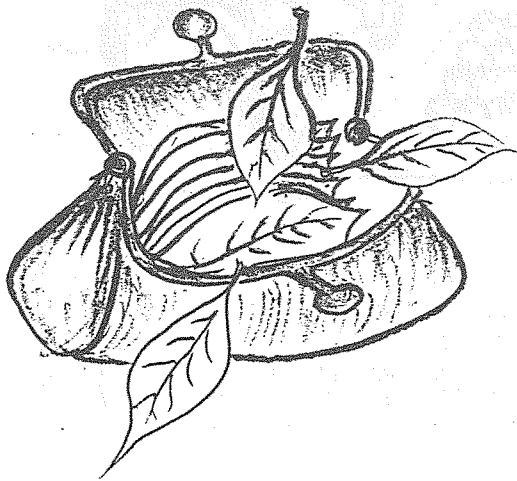
いました。魚を売って

くださいというので、

たくさん売ってあげま

した。帰って財布の中を

見たら、受け取った時はたし

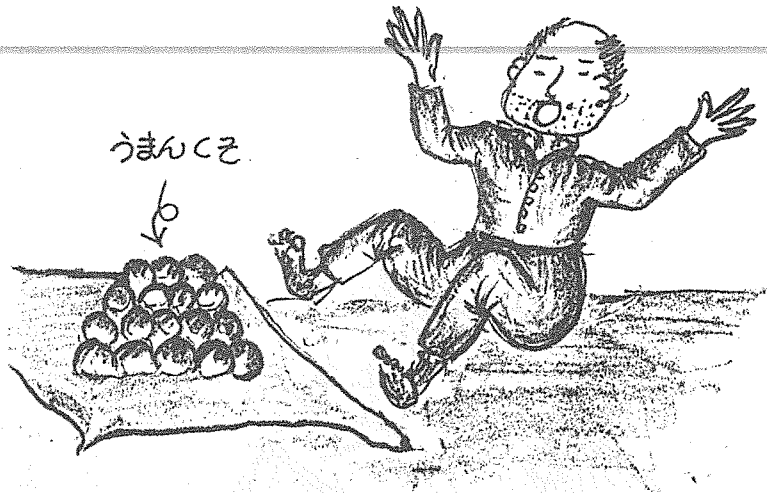


かにお金だったのに、木の葉っぱばかりだったそうです。又、ある晩がた、鬼が久保の親類で御馳走があってお酒を飲んで上機嫌で鼻歌を歌いながら帰っていると、きれいな花嫁さんが立っていて、「おじさんおじさん、暗くなって一人じゃあさびしく、どうしようかと思っています。一しょに連れて帰ってくださいね」というので連れて帰ってやりました。

しばらく行くと「ここが私の家です。ちょっと寄ってってください」というのでよることにしました。「ちようどだんごが出来ています。子どもさんのみやげにあげましょう」というので、親類でもらった御馳走の入っているふろしき包みといっしょに包んでもらって帰りました。

「おおいま帰ったど、途中でだんごももらって来た。早くたべなさい」と言うので、子どもたちが大喜びで開いて見ると、親類の御馳走や魚など一つも入っていないで、馬のふんがどっさり入っていたそうです。

こんな話を聞いて、政吉じいさんも暗くなってそこを通ってみました。又きれいな花嫁さんが立っていて、「こ



いって前を歩かせました。「おくんさんは中々お嫁さんに化けるのが上手じゃ、うん、中々うまいね。ところで、

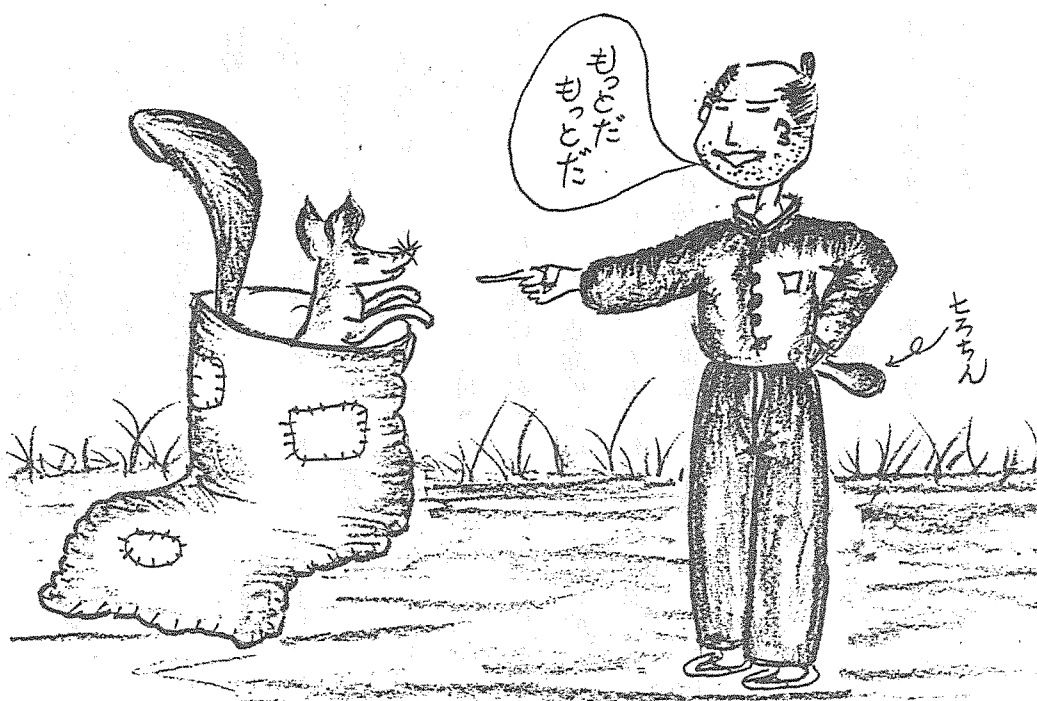
これから先はさびしいから連れていってくださいい」と言うのです。政吉いさんは「おおあんたはそこん先のおくんさんじゃねか、きれいなお嫁さんになったね。さき私の前をきなさい」と

おくんさんは何を使って化けるんですか」と尋ねると、花嫁さんはとくいになって「私は六ろちんというこんなものですよ」と言って小さなしゃもじをみせました。政吉いさんは「ほほうなるほど、それはいいものじゃあ、しかしお嫁さんにおおきな尻尾が見えているとは残念。私なんか七ろちんを使ってこれの通り尻尾なんか見せないよ、ハッハッハッハ……」と笑いました。

そこで花嫁のおくんさんは、「その七ろちんと私の六ろちんをかえっこしてくださいませんか」とたのみました。「そりゃいいとも、私はいくつも持っている。では七ろちんの使い方を教えてあげよう」と言いながら、ふところから大袋をとり出して頭からかぶらせ「うまいぞ、うまいぞ、もっとだ、うまいうまい、これ尻尾が見えなくなった」と言うが早いか袋の口をしっかりとめて、かついでいきました。

「助けてください、助けてください。政吉さん、これからは決していたずらはしませんから」とことわりを言ったので「今夜は七ろちんだった。私は八ろちん、九ろち

ん、十ろちんといろいろ持っている。これからいたずら
すると許さんぞ」と袋から出してやりました。
それからおこんぎつねはいたずらをやめて、政吉じい
さんと仲良しになっていたとか。



第二部 伝説・昔ばなしの部

川上神社のお話



太平寺

川上神社

氏子

奥高鍋と

でもいうの

だろうか、

太平寺の西

端、宮田川

のほとりに

五百坪余り

の社域をも

つ川上神社

がある。

神苑には

一抱え程の

杉の木立に混じって、楠の大木・雑木等が生い茂がり、うっそうとした雰囲気はいかにもお社にふさわしい。花崗岩の鳥居をくぐり素朴な石段を登って、社殿に近付くにつれて、自ずから身が引き締まってくる。

いくつかの石段を登りつめ、最も奥まった所に舞殿、拝殿、本殿が設けられている。私はこの本殿の造りと、彫刻が大変貴重な造営物だとお聞きして、参拝した。

丁度その時、当社の氏子である斉藤江盛さんと野村勇さんが、秋の例祭準備のためにお見えになり、案内をしていただいた。早速お話を聞きながら本殿を拝観させてもらった。二米四方程の本殿の宮造りは実に見事なもので、手がこんでいる。正面軒下には松に鶴を配したほりものの額が掲げてあり、左右の軒先には唐猫（からねこ）の彫り物、両袖には鯉の滝登りの彫刻がほどこされている。樺に彫刻したというこの彫り物は七十有余年を経た今日でも、当時の工匠の心と技が光り輝いていた。

また、本殿の造りが素晴らしい。今日これだけの物を造るには大変なことであろう。両氏の話によると、宮田の「切上」さんという宮大工の手になるものだというこ

とである。特にこの彫刻は近郷の宮大工、神官の間では評判が高く、宮崎県内では珍しく貴重なものだということである。

早速文献を当たってみると、高鍋郷土教育資料集に次の様な記録が残されていた。

「高鍋町大字南高鍋字太平寺に鎮座されており、祭神は彌都波能賣命（ミズハノヒメノミコト）：（一説によると稲田姫命）で毎年旧暦の七月二十八日、九月二十八日に例祭を行う。口碑（言伝え）によると川上神社は先年、高鍋中鶴村において井手（用水路）を新設した時、宮田川の上流に神殿を造営し、川筋の井手掛け水守で参拝するならわしとなった。祭神も水波能賣命（ミズハノヒメノカミ）を祀ったという。

川上神社の例祭では、藁で大蛇の形を造り、口の中に魚の頭と尻尾を二疋分を入れて、神社前西側の大杉（三抱え程あったという）にくくりつけて置くならわしとなっていた。このことは、川上神社櫛稲田姫命神を祀るためという。」

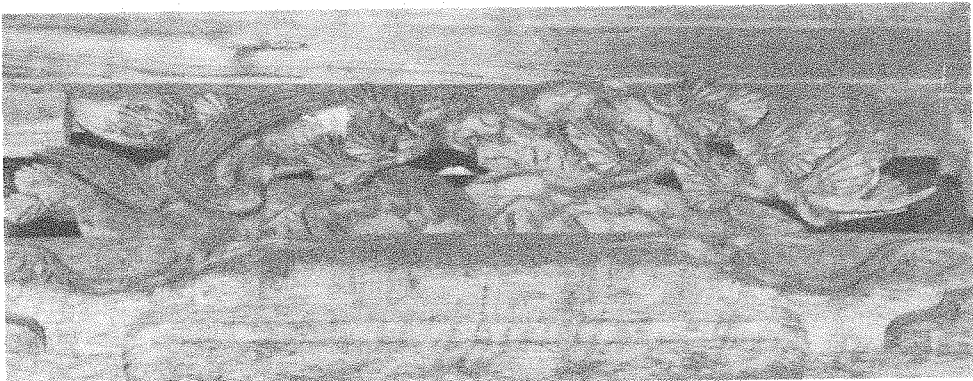
右の文献からこの神様は、宮田川筋の農民の守り神と

もいうべき、人々の信仰が厚かった神ではないだろうか。

以前は氏子も大勢いたが、現在では十名の氏子でお守りしているという。神社のいわれといい、貴重な造営物といい、高鍋町の宝の一つと思うことだ。

（社会教育指導員

古江悦郎記）



秋月清観公の仁政

高鍋郷土教育資料集より

清観公は、幼い頃の名を「黒帽子」と言い、大変賢く、頭脳が勝れ学問好きでしたから、細井平州という学者について学び、学問を深めました。また心が広く慈しみ深い、肝っ玉の太い子どもでした。

十八歳の時には父の後を継ぎ、第七代秋月種茂公として高鍋藩主となられ、十九歳の時には高鍋に帰られて藩を治められるようになりました。

公は士民（藩内に住む人々）の生活に常に目を向けられ、いろいろなきまりを作られました。藩内に、暮らしが貧しく、子どもの多い者がいるのを聞いて、もし子どもが三人いる者にはその中一人に禄（給与）を与えましたし、四人の子どもがいる場合は二人の子どもに食い扶持（ぶち）を与えました。そして五人、六人……の場合にも、こんな割合で扶持（ぶち）を与えましたが、子どもが十歳になると、与えることを止めることに決めました。

また、生活に困っている者、一家の内病気にかかる者が多い場合には、穀物や薬を与えましたが、「にんじん」その他薬の値段の高いものは、前もって高鍋藩の倉庫に買っておき、士民の願い出によってその薬を分け与えました。そしてその代金は、無理のないように数年かけて返すようにしました。

ある時、城下町に大火事があり、沢山の人が焼け出され住む家もなくしてしまいました。清観公は大変心配されて、急いで粥（かゆ）を炊かせられ、これを被災者へ分けてやられました。また、日頃鷹狩りに使っておられた仮小屋を、急に小屋掛け出来ないで困っている人達に使うように言い渡し、その上普請（ふしん）家の修繕や新築の助けとして、一人に大木を四本あて下し与えられました。住民は皆あまりの有難さに辞退した者もあったそうです。

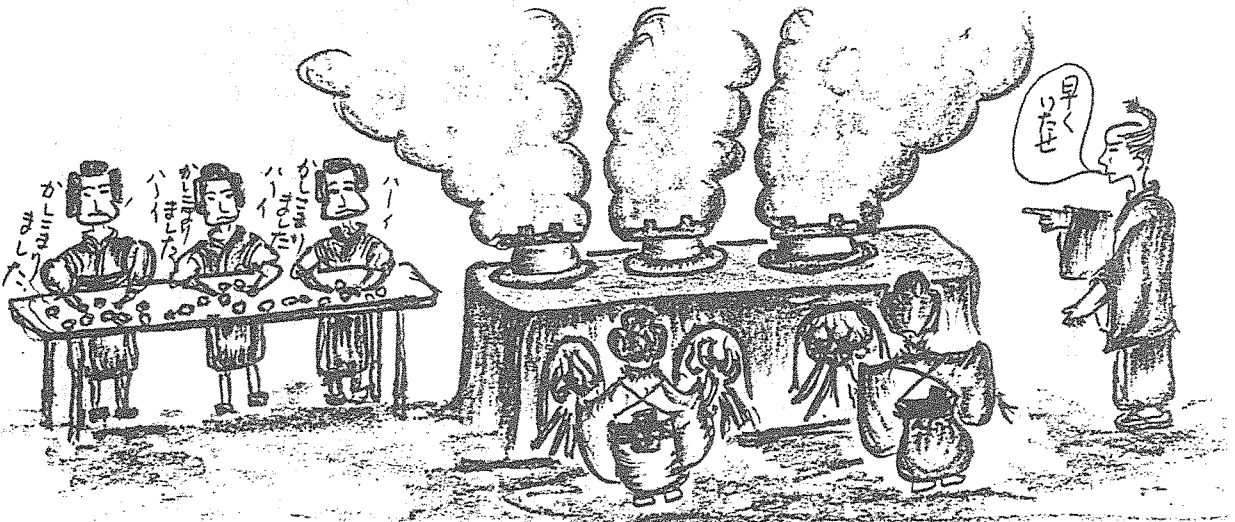
公は、藩内の産業を起こすことにも力を注がれました。薩摩の国には良い馬が多いということを聞かれ、わざわざ使いをおやりになって牝馬七匹を買い求められ、馬の改良をされたり、堤防を築いて大水から田畑や人家を守

ったり、用水路を造って米の増産を図ったり、荒れ地を開く等農業を盛んにされました。

その反面、生活のきまりには厳しくされました。贅沢（ぜいたく）したり、賭博（かけごと）には特にきびしく禁止され、もし、きまりを破る者がある時には向こう三軒両隣の者を皆罪に問うことにされました。そして清観公自らも努めて儉約をされました。

しかし厳しいだけではなく、領民の娯楽（楽しみ）についてもよく考えておいでになりました。自分のお屋敷に舞台を作られて、時々能楽（よう曲を歌いながら舞う）を催し、領民（藩内の人々）を呼ばれて、公も共に観覧されて楽しめました。

公は又、諸役人が多忙で学問する暇がないのを察せられて、毎月二回家臣の儒



教学者（昔の中国の人の道の教え）に命ぜられ、藩の講堂で講義をさせられこれを聴かせることにされました。その時公は壇（だん）の上から降りて、諸役人と共に講義を聞かれ、師（先生）を崇め（あがめ）敬い・尊ぶこと）ることの模範を示されました。

更に、領民の中で七十歳以上の者数百人を屋敷に招いて、庭に席を設け、公自ら宴（うたげ）を与えられその子等をも宴席に連ねさせて、老人を敬うことを諭（さと）されました。百歳になった者には俸（物又はお金）を与えられることにされました。このように清観公はお年寄りも極めて大事にされました。

ある時、水谷原方面へ鷹狩りにいかれたことがありますが、その時

田んぼで田をたがやしている百姓がいました。ところがその百姓は一生懸命に働き続けていて、少しも休もうとしないのです。その時清観公がふと田んぼの「あぜ」をみられると、そこには百姓の弁当が置いてあるのです。公はこれをご覧になると、家臣に命じてその弁当を解かせてご覧になりました。ところが驚いたことに、中に入っていたものは大麥粗末な食べ物だったのです。菜っぱがほとんどで、それに「トウキビ団子」が二、三個あったもので、米粒などは一粒もないのです。公はしばらくの間これをじっと眺めておられましたが、目には涙がキラリと光っていました。そして静かに口を開かれると、「百姓たちは、はげしい労働をするのに、米や麦さえ食うことが出来ず終日働いているのだ。ほんとうにかわいそうではない」

といって、その日お供をしてきた者すべてをご前に呼び出し、

「この弁当を皆一口ずつ食べてみるがよい」

といわれると、自分もこれを食べてごらんになりました。弁当は誠にまずいもので、とても食べられるもので

はありませんでした。

やがて公は、その百姓をお呼びになって、

「自分たちは、お前の弁当を無断で食べ、お前の食べ物をなくしてしまった。誠に済まないことをした。どうか許してくれ、そのかわり自分たちが持ってきた弁当があるのでこれを与えてやる」

といって、酒、肴に、米の飯を与えられました。

百姓は意外な事なりゆきにびっくりしましたが、大變恐れ入るとともに、清観公の同情心の深いことに感じいり、熱い涙をながしました。この様子をみた家臣の者たちも感激の涙を流したということです。

万事がこのような有様でしたから、領民はこぞって清観公を慕い敬っていました。それで公のご安泰を祈らない者はなく、年貢（今の税金）など庄屋から一々催促しなくても上納（おさめること）を怠る者はありませんでした。

ある年のことです。雨がながいこと降らず干拔となり、田植えも出来ないことがありました。領民は非常に苦しんで連日雨乞いの行事をしましたが、一向に雨は降りそ

うにありません。

清観公は大変心を痛められ、神官とかお寺の坊さんとかを呼んで祈願されましたが、それでもだめでした。公はこんな様子をご覧になり、このままでは領民の苦しみはまだまだ続くに違いないといって、自分から「はだし」で木城村の比木神社へ雨乞いに行くと言いだしたのです。比木神社はお城からおよそ二里（約八キロメートル）もある大国主命（おおくにぬしのみこと）を祀っている神社ですので、家臣たちの驚きようは一通りではありません。

「このカンカン照りに、しかも二里もはだしで往復されたら、きっと病気になられるに決まっています」

といって、みんなで殿様を諫め（いさめ）ました。殿様は皆の諫めにやっと草履を着けることだけを承知なさって、笠もかぶらず神社へ参拝されて雨乞いを祈願されました。

心を込めた雨乞いの祈とうもいよいよ済んでお城への帰途へ着かれました。ところが、殿様のご一行がまだお城に着かれないうちに、大粒の雨がぽつりぽつりと落ち

始め、お城に入られると同時に大雨となりました。領民の喜びようは大変なものでした。

こんなことがあってから、清観公を慕い敬う気持ちがますます強くなっていったということです。

痛快・小丸川乗切り伝

(秋月種信公)

高鍋郷土教育資料集より

種信公は文武両道に勝れられ大変賢い方でしたが、思い切ったことをよくなさることでも有名でした。家臣の中に権力を振り回す者でもいると、きつく戒められると共に広く人材を求められて召し抱えられました。下の者に対しては愛憐（情け・慈しみ）の心をもって治められました。したがって権臣（権力のある家来）の頭が低くなり、勝れた家来が沢山出るようになりました。ところが、甚だ「かんしゃく」の強い方で、一度思い立ったことはどうしてもやりつけねば気が済まぬ、というところもあったのです。

ある時のことです。都農・美々津の方面まで遠乗りに出掛けられました。ところがお着きになる頃、たまたま大雨が降り出し仕方なく滞在されることになりましたが、一夜明けて夜が白みかけた頃美々津を出られ、都農・川南を過ぎ小丸川までおいでになりますと、昨日からの大

雨で小丸川は水かさが増し濁流が渦巻いて流れているのです。この様子ではとても渡れそうにありません。一同ははたと困り川辺に立ちすくみました。お供の者は口を揃えて、

「殿様、水が減るまでお待ちになって下さい」

しきりに進めましたが、殿様は

「いや、渡るぞ」

と、今にも馬に鞭を当てようとなさるのです。お供の者はこれは一大事とばかり

「いや、いや、いけませんぞ。もしものがあつては大変です」

と、止めますが、殿様は

「いやかまわぬ、そこを放せ」

と大声で怒鳴りつけながら、馬に一鞭あてて濁流渦巻く川へザンブとばかり乗入れなさいました。これを見た仲間（ちゅうげん）河野某（石原）は種信公に続いて濁流めがけてザンブと飛び込み、馬の「尻がい」（馬の鞍がずらない様に尾に掛けるもの）に取り付きながらお供しました。



しかし、何しろ水流が速い上に水が逆巻いていきますので、

ともすると流されそうになります。殿様はこんな様子を御覧になって、にこつ、とされながら、

「おお、河野か、○石加増だ、がんばれよ」

と、おっしゃるのです。河野某も必死に泳ぎながら

「有難うございます」

と、答えます。殿様も馬も河野も大波に洗われながら、少しずつ進んでいきます。殿様はまたもや振り返られて、

「おお、河野か、○石の加増だ、頑張れよ」

「有難うございます」

と、あっぱ、あっぱしながら答えます。やがて中流にさしかかる頃には、河野はもうへとへとである。殿様は心配されて、

「おお、河野、これから半分行ったら○石加増だぞ」

「は・は・は……はーい、有難うございます」

約束の所までいくと、殿様は

「おい河野、見事乗切ったら○石加増だぞ」

「はーっ」

やがて殿様は、濁流渦巻く川を遂に乗り切られて、無事に向こう岸へ辿り着かれました。勿論「尻がい」に取り付きながらも殿をお守りしながら泳ぎ切った河野某も無事だった。

種信公は、河野の忠義を大変喜ばれ、城に帰られるとすぐに十五石加増のお墨付きを下さったのでした。それと同時に短刀も拝領して大変面目を施して意気揚々と帰りました。河野某も偉いには相違ないが、河野某が途中で力尽きてはと氣遣われ「何石加増」と何度も何度も声をかけられて進まれた殿様も立派でした。

この一事で、家臣を慈しまれたことがよくわかります

が、その後、種信公を慕う家来がますます増えていった
ということですよ。

毛比呂計神社の話

中鶴 稲田ミツエ 七十五歳

私がまだ幼い頃、父や年寄りから聞いた話です。

毛比呂計神社は、南高鍋字茂広毛平付にありました。
ずっと昔から中鶴の人々の手によってお祀りされてきま
したが、地区からずいぶん遠く、お祀りするのに不便な
こともあって、現在の中鶴屋敷に移されました。お祀り

